

吉田道灌雄飛録

六

L289
才

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

か 本 安見料
 蔵書荒喰并紛失未
 未代金申受不又貸
 皆所所上と万一社来り
 別所見料ト受之也
 書林 高橋傳吾



太田道灌雄飛録卷之六

目録

- 一 大森伊豆守上杉定正を叛く附 相州平塚軍の事
- 一 成氏の上杉と和平の事附 成氏古河へ帰城の事
- 一 原胤繁定正を背く并上杉不和の事
- 附 道灌鴻の臺出張胤繁討死雁南為城の事
- 一 両子兼下総を争ふ并道灌再び鵠の臺出張孝胤敗軍の事
- 一 道灌下総白井の城を攻る并太田因出助討死白井為城の事
- 一 定正が近臣道灌を逸せ并道灌扇ヶ谷へ出仕の事
- 一 上杉定正が奸計を依り太田道灌相州糟屋を討死の事

太田道灌雄飛録卷之六

源持賢入道

源持賢入道
大田道灌伝金録卷之六

太田道灌雄飛録卷之六

東都 木村梅年忠貞編輯

○大森伊豆守上杉定正を叛く附り道灌相州平塚軍の事

此は又相州小田原の城主大森伊豆守の多年扇が谷の旗下かりたるが。いつある
思慮やありん定正を叛く成氏へ志を通ずる由その所法かきなりし。定正
らことをいふ大に怒りゆふ奉の天のふりぬ花の地句ひと殊せよと。太田道
灌は兵士を添くは向ける。大森の敵を防ぐとあり。同國平塚に城を
構え七百餘騎を置く。道灌は武及在赤在るれは。赤より直に地句ひ
ゆ多兵士僅に十騎を過ぐる。齊藤加賀守。道灌はむひて。地勢あまの
益勢あり。こもりく。合戦のけん。存ざるあり。其より。赤士も危きいん
と。中道は。道灌少も。其より。気色を。一揆の起り

文明三年卯の年六月より此より八年の星霜を経成氏も既に十二
 歳をぞわすたる。ゆゑに馬加康胤入道常輝奕々進歩する。其の
 兵百勝をさし副く。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 政附は題けり。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 中を似せられたる。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 救の帳世にいつる。形のごとく有り。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 荒れ。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 吹。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 月の影ハ青苔を照く。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 梢は叫び。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 後者のいり。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補

も其のまゝ。柳條夕をびく。槿花暮。わはる。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 まわ。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 心。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補

○原胤繁定正を救く。附り兩上杉不和。兵は道権下總の國
 鳩の臺へ公辰の事

さる。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 後。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 兵軍。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 扇。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 定。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補
 己。其の功を以て又國岩の城を築田中移を補

勝るも。かりしむるは八州の士民皆道隆の仁徳を慕ひ振ふる者ありて定
正はあつひ。山の内の形定を背く者日を追く多くなるとなり。こまに
より形定大に憤り抑あ上杉の骨肉の中あり然るに互に水魚の埒りひ
なりて好ま他家ト比まきもの也。今あ家の既ハ八州の棟梁亦國領府の
職多し何ぞ各々の思ひを。形定が後軍を別離せり。定正が隨兵と
するを遺恨を。さるるに西存ありくのり。と猜む心は崩る。
上あさるるもなれども心中の害を挿くと終に確執の種とあり。多
くそくそを。此は下德國の位人千葉が家長系式部少輔胤繁を
率比扇が谷の旗下あり多を山内形定の方より密に人を以種くよ
れ備ひ定正を背くせく終に味方と成し。此の扇が谷定正侍へ
て安うぬる。多し。後軍を別定より。終に差を公

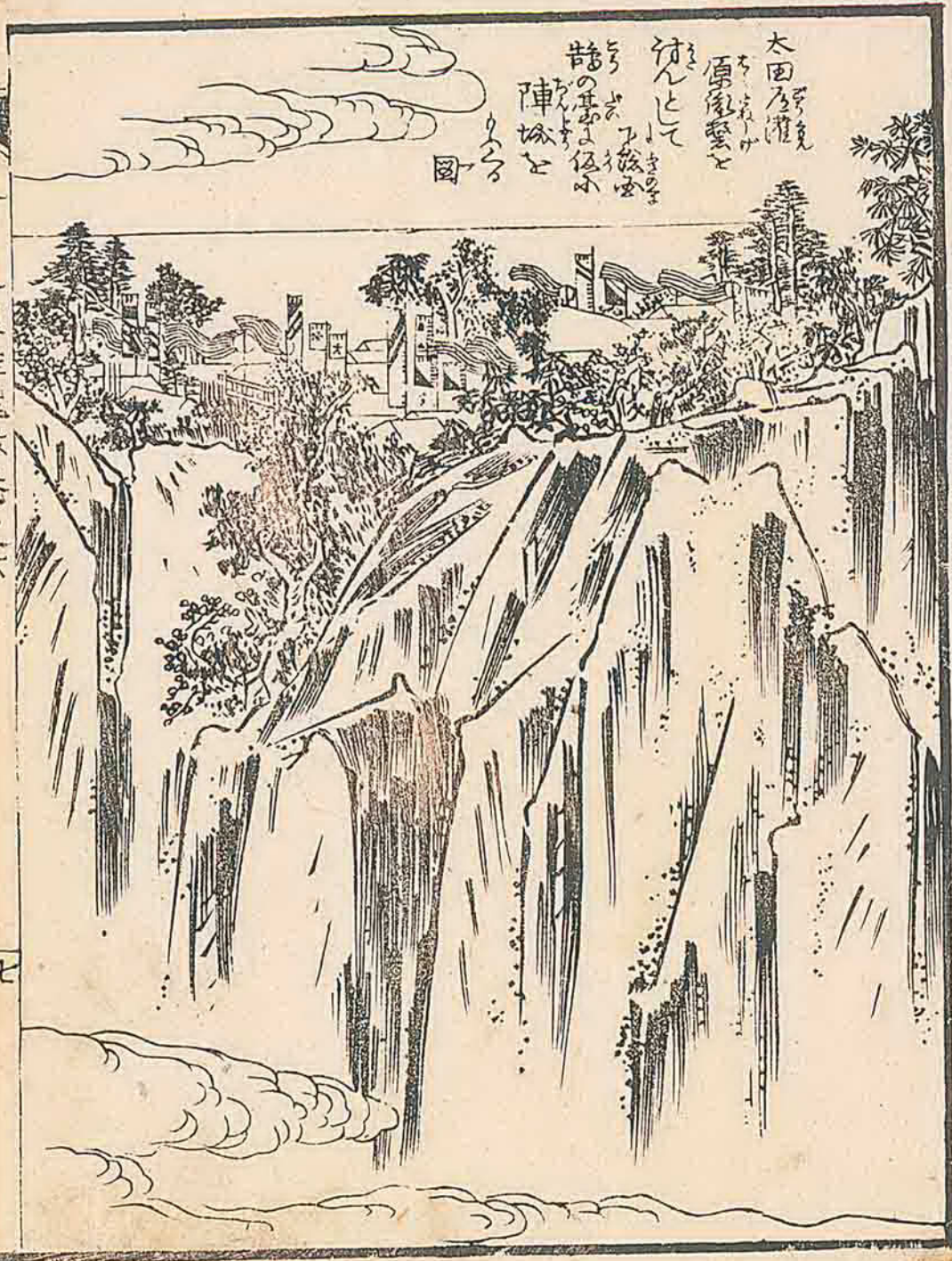
味方の勢ハ太畧山内へ後へ。殊に人をもよ。胤繁ハ陪臣といひ
味方の中にも有勢の大名一人を討て万人を懲む。政治の法とて
太田入道道隆に命じて彼を馳向ひ胤繁を誅せよとて。文明十年
戊戌七月。太田持資入道道准一子。胤繁を引率して武蔵佐土を打立
下德國は後向ひ。系式部少輔胤繁此由を笑て。さるる味方から防戦の
利をせよとて。同國臼井の城の堀を深く。壘を高く。柵を修理ハ
り。櫓を上げ。勢七百餘人。楯籠り。近隣を犯し掠めて兵糧を奪ひ
ぬ。又程遠き境を。切て國兵を催促し。堅固を。構へり。太田入
道ハ臼井の城は神。要害を伺ひ。る。力攻め。落すと見課せられハ
城。夷す。を。先。同國葛飾郡鴻の臺といふ。要。あり。地利を。立
要害。付て向ひ。城を。立。抑。此。鵠の。臺。といふ。西南ハ利根川の

流漲り多し。麓を過る。是を我良女岐の瀬と号し。切峯多し。時々。屏
 風を立てる。是より上にあたり。松戸といふ。下は市川といふ。よ渡り
 船二つあり。此外中ハ。はるべ。死にもなし。彼より。鳴の臺は。登る。由。あ。方。せ。小
 坂。峻。く。馬の鼻突く。や。ど。な。れ。バ。進。退。極。く。危。険。大。自。の。方。市。川。の。渡。り
 口。中。を。横。川。あり。く。俵。子。細。き。橋。一。つ。を。こ。え。バ。此。橋。を。攻。外。せ。人。馬。の。通。路。を
 失。ふ。南。の。方。中。真。間。の。重。松。森。と。し。て。城。中。を。隠。ひ。隠。に。又。搦。み。松。戸。の
 渡。り。中。坂。峻。く。死。細。道。也。たり。は。矢。得。谷。今。ハ。夫。と。い。ふ。谷。あ。り。く。通。路
 設。け。柵。を。振。逆。茂。木。茂。く。引。双。べ。半。櫓。敷。多。揚。げ。く。用。意。悉。く。仰。り。く。
 無。双。の。城。を。築。築。う。り。れ。敵。方。也。ハ。亦。亂。繁。内。々。評。級。一。く。も。道。清
 多。く。城。を。攻。む。敵。の。多。意。を。窺。ひ。此。方。より。逆。突。あ。り。て。付。ち。く。と。ん。と。悉

て。の。國。表。し。たり。く。も。あ。り。違。ひ。道。清。ハ。城。を。攻。め。バ。却。之。城。郭。を
 搦。へ。用。心。極。く。軍。も。せ。ざ。り。く。亦。が。支。度。相。違。一。く。空。しく。日。教。を。送。り
 たり。其。後。道。清。案。内。知。り。る。所。の。者。数。十。人。を。求。り。金。銀。を。与。へ。啓。し
 曰。井。の。城。は。籠。り。く。軍。兵。其。の。父。母。妻。子。并。は。雜。人。系。の。妻。子。亦。あ。り。と。こ
 悉。く。搜。し。求。め。鴉。の。臺。へ。引。丸。り。く。渠。亦。を。あ。り。く。勞。り。て。人。質。も。と。あ。り
 たり。か。て。後。其。由。條。の。者。あり。城。兵。の。方。へ。云。り。せ。る。ハ。面。々。の。妻。子。を。バ
 道。灌。が。方。へ。預。り。ぬ。ゆ。今。度。道。清。へ。回。り。忠。告。あり。妻。子。の。命。を。助。け
 の。と。か。バ。先。規。の。所。領。相。違。なく。あ。り。く。扇。が。谷。の。家。人。と。な。る。べ。し。若。し
 又。城。内。亂。繁。一。味。し。て。あ。る。小。敵。を。も。の。か。は。是。非。及。ば。さ。る。り。と
 とも。が。妻。子。の。命。を。拘。り。中。に。候。し。と。懸。勤。也。と。中。送。り。る。城。兵。は。是。を
 安。く。あ。り。も。早。晚。心。を。翻。へ。降。未。せん。と。計。ふ。や。も。城。中。ハ。何。と。なく。

物強しかり行て互に人を疑ひつゝ、
 道清のよゆ馳加つる。かりに城を残り止るもの漸二十人ほど放り
 たり。道清の軍勢千五百騎の足跡を今に易しとて、
 百騎の残して、
 鷓の暮をもちて。道清則ち降参の者せを先降し、
 同奉七月廿五日、井の城を攻くる。城を系式部、
 浦胤繁、今を道
 清の軍勢を以防ぐも、
 二十人ほどを殺へて、
 煙を、と立を、
 中へ逃び入る。城はもれなく、
 德國の住人、
 井の城の峻法して、
 流繁を放ると、
 二百人ほどを引具くと、
 我野といふ所

を出張し、
 引ゆし、
 中へ角が谷の旗下、
 攻落し、
 甚く、
 千二百騎を、
 攻獲ひ、
 然るに、
 飛を、
 軍士も、
 法苗裔、
 今目前、
 鹿の現、
 軍は、
 春日大、
 神の



大田道清
 原像と
 行んとて
 詰の基は伝小
 陣城と
 〇〇〇



勇立と各信肝は銘に勅授とて馳せ知を。又道灌此
旗の上は山鳩二の飛来と。翩翩と舞う故味方ハ是力と
奏技を打ち相敵ハ城中の軍ハ彼此の祥瑞と云く氣力を失ひ
叶はぬと云ひ先やと落行けハ歷南左郎も堪へずと云ふ
なりと云ふ下總上總の一揆どもちつと云ふ敗れ道灌ハ打ぬ首
ども斬うけぬ故に放火一丈より在ホへ一をゆりて云

○西千葉下總を率ふ并道灌再嶋の臺出張子兼孝胤敗軍の事

此は又子兼のる加入道常輝が嫡子三郎孝胤ハ先年父の入道を相侍ハ
伯父胤直兄弟の胤宣ホは後切らせ成氏へハ母三の才公の入り
成氏殊に賞しあひく千葉一依ハ皆悉くもなり千葉介少を任せられ
る。拙るは上杉方より胤直が成氏のみよせびつらと憐れ胤直を

実胤を父の一依と云く。是又京都へ中七子兼介を任じ下總へ召を召し

父も成氏孝胤と秘蔵の者と思はる。子兼の城に召を召し開実胤本
領へ入部ふ叶くと武蔵の石濱系は葛西を佐よ知れし時の勢を
柄ぬりしが終に世の中を迷懐くと道世。英濃國へ上りて兩居一
向に義子内依と居任考るる。さるにちりて其兄の次郎自胤を上杉

より召立実胤の召を召し千葉介を任じ。是を武蔵の子兼と号し
今度下總のふ系介孝胤ハ長尾景春と一味と云く。孝胤は妨げ
上又成氏上杉と内和終に拙るべしと云ふの由を遮りて孝胤は妨げ
中せしむ。ちりての振色も悉く上杉家の讐敵の随一と此時退治し

自胤を召立魁首と上杉より加勢を召し下總へ一を打入れ
る。あ徳州の地士せる系介の嫡流絶るを歎きぬる。おあれば色

自胤へを為さる。上杉より此を成氏へ内意を好む加勢も、病等の
 わくませ、病くより調ふ事せし。太田道隆は命ぜらる。道隆則、後、孝胤と
 又く國府、孝胤陣城を搦へる。文明十年十二月十日、千系孝胤へ居
 あぐ敵のあつるを待て、先氣獲し、とらぐ。我の敵にべく、は、
 半途へゆき、我んと家の子系二郎胤次、木内五郎、為信を先鋒と
 して、外、徳國境根系へ出張せし。道隆をせまくと、和して、千葉自胤と
 才、圖書助と、左右は、使へ、有藤加賀守を先陣と、室田源八郎を後、使
 とし、款味方、間近く、ぬまふ。互ひは、旗のよをせ、先相をり、に、をり、
 我の、道隆が、堅陣、右を打たり、より、扶け、あを、責れば、後より、救て
 孝胤が、方ゆき、へ、負付、死多る、事。孝胤、獅子の、怒り、を、し、各、を
 一つ、ゆき、太田が、中軍、切入と、身を、搦、く、下、初、を、せ、士、卒、各、一、と

なり。道隆が、旗、を、と、く、ま、平地、は、系、込、り、バ、手、肘、本、陣、は、合、圍、の、具、を
 吹、ら、る、は、先、陣、後、陣、左、右、の、備、皆、一、回、は、具、を、合、せ、千、系、有、藤、太、田、室、田、
 等、の、声、を、上、げ、孝、胤、が、軍、勢、を、十、重、廿、重、系、系、圍、一、人、も、洩、ら、せ、と、攻、め、り、
 孝胤の陣中、は、系、系、と、此、圍、を、先、と、せ、れ、ど、千、系、等、の、鉄、桶、の、ゆ、く、
 右、は、樹、た、り、は、樹、ど、も、破、ら、る、能、は、な、し、則、徳、島、武、彦、が、秘、し、く、系、系、和、の、
 常、山、長、蛇、の、陣、法、あ、り、バ、孝、胤、も、既、に、討、死、せ、ん、と、あ、ひ、究、り、系、系、へ、郎、等、
 系、系、木、内、仰、見、は、ぬ、く、地、を、事、り、太、田、入、道、が、計、策、よ、り、味、方、多、く、お、せ、
 たり、君、中、あ、り、く、此、を、退、れ、後、度、の、合、戦、ゆ、へ、我、の、軍、勢、を、討、死、し、多、
 奉、の、内、恩、を、報、せ、ん、と、系、胤、次、ハ、先、へ、と、り、木、内、為、信、ハ、後、に、進、付、
 若、を、追、ひ、拂、ひ、し、後、三、務、終、は、一、方、を、切、抜、り、と、れ、ど、系、も、木、内、も、朱、に、
 ぬ、く、敵、の、病、を、蒙、り、と、り、バ、孝、胤、を、白、井、の、方、へ、落、し、り、今、ハ、心、易、と

大日本外傳卷之六

敵陣は弛せ入る。あ入るとも乱軍の中は討死を孝胤八家の子に討死を
念ひ及ぶどもも罪なく約を早く急ぐ。あは討死されざるものども
追ふは慕ひあり。彼はと同日く漸は臼井の陣へ入るる。

○道灌下総臼井の城を攻め并太田図書助討死臼井落城の事

かくく孝胤八臼井の城を攻め入る。急よと文を以勢を集め。太田入るが勢
あつとど待らるる。道灌は定まら。一は油陣はとべき中よりなまは
則臼井の陣攻め。千葉介自胤。太田図書助資忠は命を盡く。武田入る
陣し。千葉と太田の敵の強弱のともぬら。臼井の城を攻落すと
あ勢合せく七百餘騎。退る搦手の分と定め。同十二年正月十八日。臼井の
城へぞ押寄る。孝胤も道灌が軍の仕給。普通は起これ。味方大勢と
いども容易中の打くゆ。防禦の術怠らざる。太田方も小勢と云ひ。

珠中要害の丸城は。これ管領への美事なり。いども。是も延

引及びくる。故に注力攻め。死すに引退る陣を。城の中

押への兵士を討して。先敵方の者せを討たると。上総國長南乃城を

武田三河入道と攻め。四月廿日降参り。自胤は属を。是を定て丸谷の

上総介も陣を乞ふ。まより上総國飯沼の城を攻めんと。旗を。城を

海上の中も師亂。引く。自胤へ。自胤未

多入。入。引く。あ総州は。大。一。先。長陣

あ。臼井の陣。今。武。引。返。と

中。國。の。變。と。何。見。物。法。又。彼

あ。が。城。を。一。監。守。と。士。率。中。城。門。を。押

開き一度は咄と馳出たり。大田勢ハ千葉自胤と先立せり。國
 書助資忠後陣ヲ打之徐々として引之。初子系孝胤ハ月星の夜、
 蕨と先進め今資忠が退口は毎二女三子切之入る。男書助死して退し。
 足輕の討まを下知てえんくは射せ。孝胤先子の者なりくと射傷
 されしや。瘡をくぐりえられ。資忠もも乗入ると自ら大木打振る。近
 如きバ若あは立塞り必死とぬく。我ハ千葉介自胤ハ敵城の中あり。城
 出後陣軍始りてとる。此合戦を暇な。臼井の城を棄れ
 りんと。牙備を押せ。城下を付らる。孝胤ハ城をえらむて。陰
 邪と人殺をさると引上げ。城門へ引之入る。資忠ハ國よりのく。切丁を
 敵へ退くあり。附入りは城を棄れ。大木を下おされ。羽の下より佐藤
 右兵衛。桂後原助。中納言坊をとり。死生知らざる。善者ども。門内へ

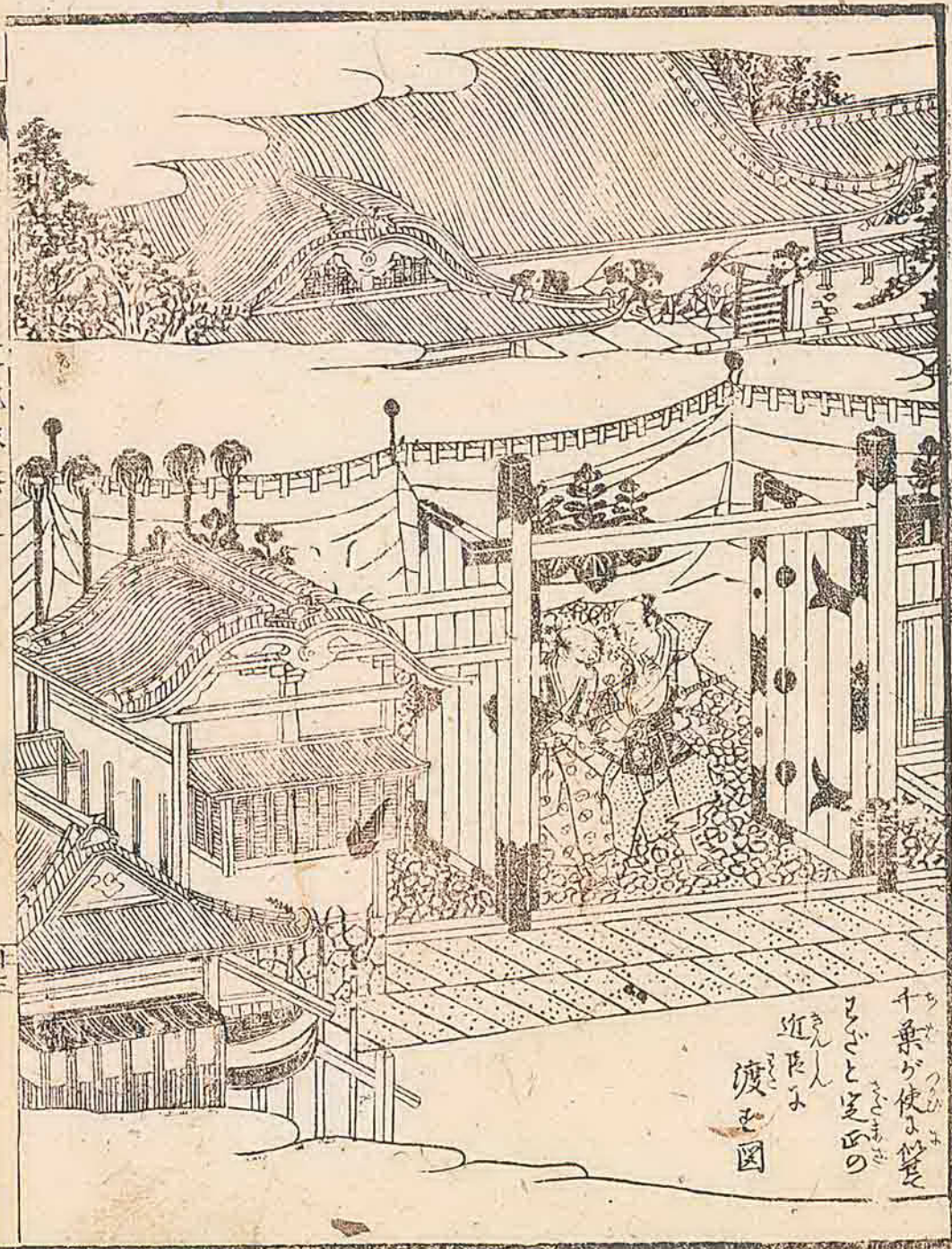
馳入ると敵ハ城戸を閉る間もかく追ひんと責我ハ資忠を二勇
 威をばり。當りてをきひ切て落し。先子もみ。働け。ハ士卒ハ程もよを
 碇き追ひ込め。追ひ寄る。子変万化。と爰を途と争わたり。其
 際ハ自胤ハ外郭を棄れ。城内へ乱入る。城外も此城を落
 され。石を投をけ。矢を放ち。秘術を尽し。防戦を資忠ハ勇を揮て
 せ。自胤ハ外郭を棄れ。此を攻めと切ると射れども物とも
 せ。摩訶修羅の義とて。反らる。力を押直し。程中深く入る。大
 子の攻口は強く。足輕も。軍烈し。これ皆此の。馳事。小高
 ら。あは。双びぬ。下り。春。射。矢。先。雨。の。やく。你。入。り。味。方。の。面。く
 大。の。資。忠。と。始。と。中。納。言。坊。佐。藤。右。郎。兵。衛。桂。後。原。助。を。始。と。し。て
 又。子。系。乱。箭。の。ゆ。え。枕。を。か。へ。り。村。死。せ。自。胤。ハ。大。木。の。軍。強。く。兵。士。皆

彼軍より防ぎたる中、終に本城へ突入し、後の方より追立てば、城兵に方へ逃るの考胤ハ益念あぐる返志を術にあく命をうりて助く。何國ともあく落ゆ。是よりありく臼井の城ハ自胤のよより入りければ、則城代と重く是をせし士卒長陣の疲れを并ひ石淡の城あど内陣しうらるる。

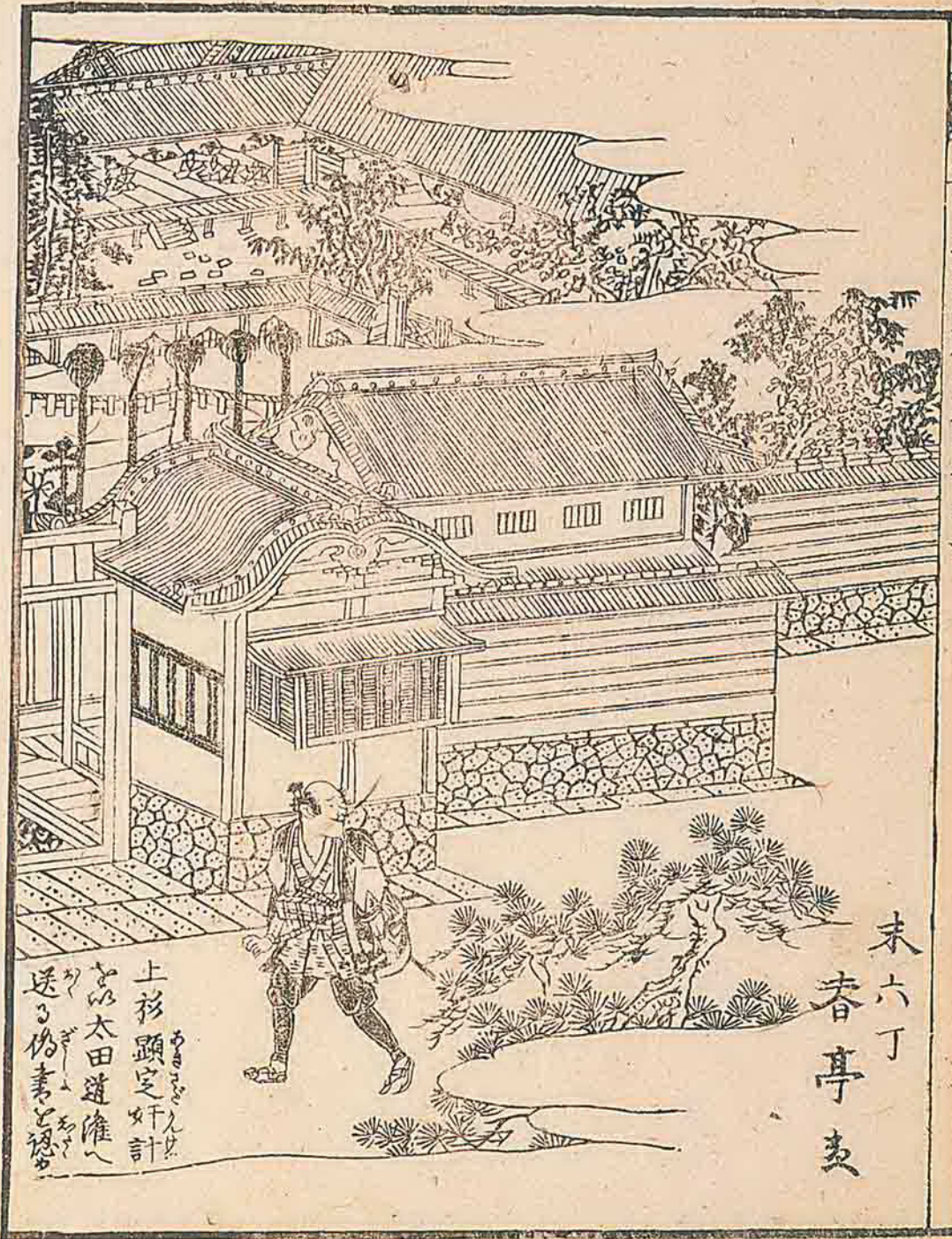
○定正が近臣道澄を遣ひ、并道澄扇谷へ出仕の事

斯く世ハ普く穩は成れど管領ハ定正も内心ハ馬は胡越の隔あり。今ハ定正目中心夫と名するもの多うり。是を田道澄ハ是を察し。此光景ゆくハ始終お家の確執と成ぬべし。今ハ御事をせめては、至心中昔返すものありぬ。かまはむ死謀を役てお家のありある所の御せん。從はま。農を志す。是より著後の移ひあり。

質素而儉を以て、又時々城を修復し、糧食を貯へ、密に味方志し、人をも披り求めり。されば山内の方ハ大身と云ひ、嫡流あり、管領の威ハ扇谷より重なり。これハ地つら魔下の庶士を侮り、輕んず。定正ハ仁義の道に疎く、兵法もせめ、拙なり。これハ政事も、さうする者なり。近習の弊も、あるを我意とあり。故長尾入道昌賢、之れ人あり。山内の旗下の士、道澄の徳を慕ひ、扇谷より、山内を、く。定正の、是を知り、苦め、形、皆、扇谷に、我が家の、人、踵を、先長尾、當時、何方へも、附く、孤獨と、形、渠が、勘、一方の、大、密に人を遣はし、是より、後、上杉と、後、道澄は、辛、目、あり、何を、道澄を、付、眼を



千乗が使ひは
 近きと定正の
 近き人
 渡玉園



上杉 顕定 奸計
 太田 道隆
 送り偽書と認

末六丁
 春亭 表

太田入道此以いせり山内殿は荷膽なり扇が谷を亡く君の御領を
 押領せんとす。又子付てハ長尾景春も元より入道が縁者かれは密に
 影定も是れ密に自らの城と密に糧米を獲り忍びくまは士族
 集り山内と謀ト合せ一時は發りて當家を退治せんとす由を密に
 承りしや。密に市虎三條の後虚を以実と偽るとりやく。定正ハ始の
 程ハ死上げせり。今この世の習ひ人々も。忠義一圓の入道かれ
 者の中は。今この世の習ひ人々も。忠義一圓の入道かれ
 ども。又人の手も理ありと。終に阿使のふ人の烟を信じて。道灌成
 跡をいぞぞと。かくと。道灌ハ在云河越のお城後終て
 扇が谷へ出仕。又山内へも来上。影定ハ道灌ありと。奏者の
 告は。大は。影定ハ子達は。一間へ後。是等の戦功を称美。是下扇が

谷より。我が家長は。定正の武威を輝。つと。是又扇が
 威權の助け。此上。益水魚のゆひ。東国を獲。殊の
 外。悦喜の。山海の。味を。丁寧。疾く。大任
 頃。道灌ハ。厚く。已。聖朝ハ。疾く。大任
 郡。糟屋の。館へ。是。暫く。還。後。又。巡見せん
 と。是。を。な。り。と。

○上杉影定が奸計に依り。太田道灌相次糟屋を討死の事

影定は。道灌山内へ。移。入。居。と。又。側。者
 ども。隠謀の。定正へ。告。是。扇が谷の。門の。邊。を。
 田舎武士の。あ。げ。一ツの。二。三。及。む。移。す。と。
 ぬ。又。肉。を。見。き。と。不。當。く。え。し。門。城

因ふに武別豊嶋郡忠刺の衣給有村小禅院あり自得山静勝
寺と号す同 道灌号静勝野此地往昔を因道灌平常御意の
居此之處に灌は法林の景像あり竹松を因某の書にせり
此の景像あり灌の銘も因傳に記し置微と云ふは是より後
心入此の景像あり灌の銘も因傳に記し置微と云ふは是より後
此所小松ひし時題を詩あり室ふ奉て巻尾と云

灌公祠

石正猗

千載称文武 関宮依翠微 不愁陵谷變 家世日光輝

追加云太田道灌二の美童を寵愛せられたる時二人を左右に置く二人の童を寵
愛せられたる一人の童のありしと云ふは是れは灌の寵愛の人のありしと云ふ
と詠ふは道灌を愛ひしと云ふは灌の寵愛の人のありしと云ふは是れは灌の寵愛の人のありしと云ふ
りしと云ふは灌の寵愛の人のありしと云ふは灌の寵愛の人のありしと云ふは灌の寵愛の人のありしと云ふ
太田道灌雄飛録卷之六大尾

題

才今に時正少於野史、少於釋史
、之野史、百歳ま、り、は是れ也
昇平恬熙、以の清閑、具園、可詩、括
童曹考也、羊村、携、雄飛録者、来、と、一
之、予、諺、と、雖、之、之、清、華、哉、二、の、少、概
中古治乱、矣、と、尋、常、釋、史、公、指、其
此、善、於、彼、也、多、其、似、是、と、飛、牛、年、表、之

世不の不辨也曾觀之徐也此也而

道清遠櫻山人書



道清遠櫻山人書

おのれ慈仁記より此のあみをだ
とくされち世の治亂具七いさな
いさきたるくあきめのもちをさ
るる下り此の比科書堂のわな
権を録しつるあきたてをついで
かの入乃のわなよりいさな
うえをいさなと慕系集をいさな
いつれとあきたてをいさな

いんぎょのわが... 此書に...
うてきぬ此冊より...
むろくつ...
よお...
は...
た...
た...
た...
た...

いんぎょのわが... 此書に...
うてきぬ此冊より...
むろくつ...
よお...
は...
た...
た...
た...
た...

石川雅望

石川雅望

文政三年庚辰秋八月脱稿鐫梓

江戸 希言子 木村忠貞著編

全 画工 北尾美丸 勝川春亭

全 画圖彫匠 加藤利助

天保十二辛丑年求版

大阪心齋橋通博勞町角

攝都書肆 伊丹屋善兵衛

皇漢洋今古書類自家積年發兌セル者ト其集

藏畜ニ充棟載車ノ夥キノミナラス品位精工價

程清廉以テ四方君子ノ愛顧ヲ待ツ

文榮堂藏版

東區南久寶寺町四丁目 八番地

阪府書林

前川善兵衛

